

兵庫探訪

②⑤ 〈朝光寺本堂〉

所在地 加東郡社町畑
電話 0795(44)0735(総寺院)

写真・文 広報委員 小山一彦



多宝塔より本堂を見る

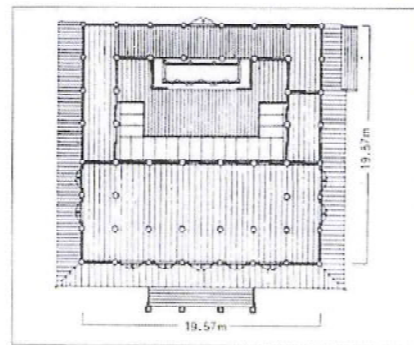
中国自動車道吉川ICより車で15分、東条町東条湖よりさらに西に進み源平古戦場で有名な三草山の南、社町にある国宝・朝光寺を訪れました。鹿野川沿いの鬱蒼とした林で囲まれた参道を歩いて石段にたどり着く、急な石段を上り詰めると山門越しに本堂がうかがえる。山門脇で御住職が出迎えてくださり、資料をいただいて本堂を拝観する。

朝光寺寺伝によれば本堂は、文治5年(1189)に現寺地の北の権現山から、この地に移し再建したという。建立年代は、厨子裏側羽目板の墨書によれば、応永20年(1413)に仏壇を造営し本尊を移したとある。また、本堂の斗拱、木鼻、扉、連子窓などの様式手法からも室町時代初期に建立されたようである。

その規模は、七間四方、寄棟造本瓦葺の大建築である。内部は前側三間通りを外陣、後部中央の桁行五間、梁間三間を内陣とし内外車は格子戸、菱格子欄間で境を区切る。外陣は側一間通りを化粧屋根裏とし、中央部は虹梁を架け鏡

天井を張る。また、連子窓よりのやわらかい光が外陣にゆきわたる。天井や組物にかすかにすがつており以前に、護摩を行っていたことがうかがえる。

御住職の御厚意により、内陣を案内していただく。内陣には須弥壇を置き、壇上には唐様の大型厨子がある。もと、三間であったものを、江戸時代に四間に改めたとの事で、厨子には秘仏である本尊十一面観音、脇立の不動明王、毘



本堂平面図(国宝大事典より抜粋)

沙門天を祀るが、開帳は60年毎で、次の開帳は30年後と聞く。

内陣に座り、厨子を見ると静寂な内に山門脇の滝よりの水音がすずしく思え、都会の喧燥を忘れさせてくれる。この滝はつくばねの滝と称し、由来は本寺周辺に自生しているツクバネによると、御住職より説明をうける。いただいた資料によると、ツクバネはジャクダン科の植物で、果実の形が羽子板で突く羽根に似ているので衝羽根と名付けられた。又、社町の天然記念物として昭和58年10月に指定され保護している植物との事である。

梅雨の時期の取材で、天候が気がかりでしたが当日は晴天に恵まれて、脇の引戸を開いていただき内陣、厨子を十分に拝観させていただきました。御住職の話によると雨模様であれば、火災をきらう為照明もない内陣、外陣はかなり暗いとのこと。又床下を吹き抜ける風により本堂内は涼しく感じられました。林に包まれた境内は本堂のほか重文の鐘楼、池田輝政侯寄進の多宝塔等が建っています。

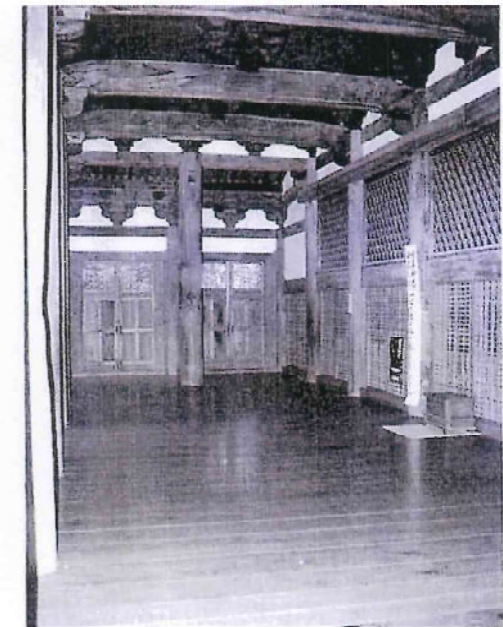
会員の皆様も一度拝観されては、いかがですか。



内陣裏、小屋組の状態



内陣の厨子
(下に墨書された羽目板が見える)



外陣を見る